

秩父市吉田石間の城峰神社の歴史と信仰

西村 敏也

はじめに

- 一 城峰神社・城峰山概況
- 二 城峰神社を支える人々
- 三 城峰神社の春季大祭と城峰講・御眷属拝借
おわりに

はじめに

全国には、オイヌサマを信仰対象として祀る、いわゆるオイヌサマ信仰寺社が数多く存在している^①。特に埼玉県秩父地方には、そのような寺社が大変多い^②。ちなみに、オイヌサマ信仰寺社とは、オイヌサマを山の神の「使い」「御眷属」もしくは「警護者」として位置付け、それを信仰対象として崇め、オイヌサマに関する言説を自己の信仰・思想・哲学の中に取り込んでいる寺社のことである^③。それらの寺社で、まま見られる現象として、狼の護符の頒布、信仰対象である狼に関する儀礼・神事
の存在、狼像の奉納事象、信仰集団の存在、狼信仰に関わる由緒の存在、寺社の周縁部に狼に関する伝承が存在していること、などが挙げられる。本稿で取り扱う埼玉県秩父市吉田石間に位置する城峰神社も、先に挙げた現象が見られるオイヌサマ信仰寺社の一つである^④。

次に本稿の課題を挙げておきたい。筆者は、オイヌサマ信仰の全体像を描くため、オイヌサマ信仰寺社の事例を、現在、秩父地方を中心に収集している^⑤。今まで、寺社やその寺社の信仰対象となっている山岳などの事例を、網羅的に収集するよう心がけてきた。本稿で、城峰神社、城峰山を取り扱い、紹介したのも、そのような意図からである。これが、本稿の課題の一つである。いずれ、それらの資料を比較検討することにより、先に掲げたオイヌサマ信仰の全体像を描く作業をしたく考えている。

そして、もう一つの課題についてである。城峰神社、城峰山に関する文献はほとんどないのが現状である。その上、過疎化により神社を支える氏子や、城峰講は激減している。城峰神社、城峰山をめぐる歴史、文化の記憶は急速に失われつつある。その歴史と文化を現段階で分かる範囲で書き留めておくことが、本稿の二つ目の課題となる。文献^⑥と聞き取り^⑦から得られた資料によって構成する。

一 城峰神社・城峰山

(1) 城峰神社の施設

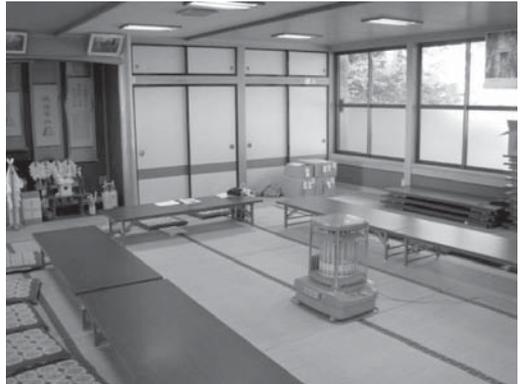
それでは、まず城峰神社と城峰山について概観しておきたい。城峰神社は、秩父市吉田石間に位置する神社であり、埼玉県秩父市、同皆野町、同神川町にまたがる城峰山（標高一〇三八^{メートル}）の山頂から三〇〇^{メートル}ほど



(写真1) 城峰神社拝殿



(写真2) 城峰神社から秩父山地を望む



(写真3) 社務所 (内部)

下った場所に鎮座している(写真1)。城峰山は、古くから山岳信仰の霊山として知られ、西秩父の雄とも呼ばれる名山である。秩父山地の中でも、ひととき目立つ存在となっている(写真2)。山頂には一等三角点、電波塔があり電波塔下部が展望台になっている⁽⁸⁾。

次に、城峰神社の境内地に関して記しておきたい。神社のある場所は、遙拝施設、里宮の場所であったと言われている。城峰神社の境内は、山腹なのに風も吹かず、暖かいと言われ、降雪しても、すぐに溶けてしまうという。先人はそれを知っていて、この場所に神社を創建したのではないかと考えられている。ただ、参道の杉並木は、明治維新の頃、植林されたと言われているが、成長した杉・檜に境内が覆われてしまったため、その下に日が当たらないようになり、寒くなってきたという。

かつては、山頂から半納集落の境まで、社家の個人地であった。土地

い、秩父市の自然公園となり、管理が神社へ任されることになった(加藤仁男氏談)。

また、現在の社務所は(写真3)、平成二年(一九九〇)に新築されたものであるが、氏子らの寄付によって建てられた。人によっては百万円を出した人もいる。行政などから援助は受けられないので、資金集めは大変であった。

次に、境内外の建築物に関してであるが、石間の入口のところに建つ記念碑は、城峰神社創建千年の時、建立したものである。昭和一七年(一九四二)のことで、東京にある城峰講で結成した「城峰山を偲ぶ会」が奉納したものである。氏子達も建立に際し、作業をおこなったという(加藤仁男氏談)。

また、城峰神社までの参道は、大きく分けて二つある。一つは半納登

利用に関して、社家へその度に連絡して許可を取る必要があった。例えば、建造物の建築、木の伐採や再造林などの植林についてである。不便であったことから、秩父市と吉田町が合併した平成一七年(二〇〇五)頃、町長にお願いして、秩父市で買い上げてもら

山口と男衾（おぶすま）登山口（半納登山口から登って道に合流する）から登る表参道コース、もう一つが、中郷登山口と漆木登山口（途中で合流する）から登る南尾根コースである。南尾根コースは健脚向きで、表参道コースのほうが登りやすい。加藤仁男氏は、かつて、半納まで車で登り、駐車した後、表参道コースを徒歩で登り、神社へ出かけたという。戦前は、各集落からすべて徒歩で登っていた。（加藤仁男氏談）

（2）城峰神社の湧水

城峰山は花崗岩から出来た山岳で、そこを濾過した水は、様々なミネラルを含有している。そのため、地元はもとより、湧水の愛好家の間でも優れた湧水として大変有名である。矢納の城峰神社がある埼玉県神川町側には、古くより御神水として重用されてきた「神泉水」がある。⁽⁹⁾その湧水は、地元の醤油醸造企業の「株式会社ヤマキ」によって管理され、醤油、豆腐製造に利用されており、地域おこしに一役買っている。⁽¹⁰⁾また、皆野町側には林道沿いに「城峰林道の湧水群」がある。⁽¹¹⁾

そして、吉田石間の城峰神社側からも良質の湧水が湧出しているのである。昔は、城峰神社境内の二ヶ所に井戸があった。これは、城峰山の湧水が貯留したものである。山頂からの高低差はそれほどない山腹にもかかわらず、湧出していたのは不思議であったという。これらの湧水は、周辺村落で日照りがあった時に「お水借り習俗」として、汲みに来た雨乞いの水でもあった。⁽¹²⁾二ヶ所のうち、一ヶ所は城峰山の真下で神社境内との間にあった「お池」と呼ばれる湧水である。もう一ヶ所は、境内で神社から見て右手下へ五〜十分下りたところにある。昔は、二ヶ所の井戸に直接水汲みに行ったという。この湧水があったお陰で、古くか



（写真4）湧水の石垣と受け台

の町職員が運転し、浄水所と城峰山の間を何往復もして水を運んだこともあったという。

その後、埼玉県が城峰山の材木の間伐事業をおこなった際、湧水を貯蓄するタンクを造った。タンクからあふれ出た水が、いつも垂れている状態だったという。湧水は、タンクから社務所脇へ引かれ、社務所脇には石垣と受け台が造られ、簡便に水が利用できるようになった。これを「城峰山銘水 岩清水」と名付けたという（写真4）。

その後、上水道が社務所へ引かれることになった。山の下の浄水所から配管され、タンクに貯蓄され、蛇口から水が出るようになった。⁽¹³⁾上水道が整備された後も、湧水は利用されたが、猪などの獣の糞尿が混ざり水質が汚染している可能性が高いということで、湧水の使用はできなくなり、閉鎖された。現在は、石垣と受け台が残るのみである（写真3）。

(3) 城峰神社・城峰山の歴史と伝承

また、城峰山には、平将門伝説が伝わっており、神社の起源の伝承とされている。すなわち、藤原秀郷に追われた将門は、わずかな部下を率いて城峰山の洞窟（将門の隠れ窟と呼ばれている）に立て籠もったが、側室であった桔梗に敵に密告され、将門は襲撃され絶命したという伝承である。将門は桔梗を切り捨てたと伝えられているが、それ故か、現在でも城峰山では、「桔梗」の花が咲かないと言われている。社記によれば、当社の創建は、天慶五年（九四二）に、将門を討ち取った秀郷が、現在の当社の境内と考えられる山頂下の平地に藤原氏神の春日四神を祀り、高岩にサルタヒコを祀り奥宮、ヤマトタケルを祀り中宮と定めたと伝えられている。また、当社は、秀郷が将門の霊を鎮めることを目的に創建したとも言われている。近世には、城峰山長伝寺（曹洞宗）が別当寺であった。同寺では、将門の守り本尊である十一面観音を祀り、その御眷属が「お猫さま」と位置づけられ、お猫さまの貸し出しもおこなわれていたという。近代になると、当社は、明治六年（一八七三）村社になっている。また同一〇年（一八七七）には、社殿・神楽殿・社務所が再建されている⁽¹⁴⁾。

二 城峰神社を支える人々

(1) 社家・宮司・社守・神職

城峰神社の社家（高岸家）は、戦前に当地を離れ、秩父市街地へ転出してしまった。家屋敷も処分して、完全に当地から離れた⁽¹⁵⁾。社家がいなくなつてからは、宮司不在の状態がしばらく続いたという。その後、上吉田の神社で宮司をしていた、現新井直行家が勤めることになった。新

井直行氏で三代目となる。

直行氏の父親の新井啓氏は、その父親より昭和二一（一九四六）（一九四七）頃、引き継ぎ、直行氏は、啓氏が平成一五年（二〇〇三）に亡くなったため、平成一七年（二〇〇五）引き継いだ⁽¹⁶⁾。啓氏の代になると本務は三峰神社となり（直行氏の本務は秩父神社）、新井家は、秩父市街地に住むようになり、祭礼の時など、特別の用事が無い限り、余り訪れることができなくなった。そのため、日常の社務は、かつては社守がおこなっていたのである。

社守は、戦前は、漆木集落の人がおこなっていた⁽¹⁷⁾。その後、中郷集落の磯田正平氏が、その後、昭和二〇（一九四五）年頃から、半納の新井相作氏が夫婦で、社務所に住んで取り組んだ。その後、昭和四〇年（一九六五）頃、新井啓氏は、三峰神社に勤めていて親しかった同僚の坂本高栄氏を城峰神社へ連れてきて、社務を任せた。坂本氏は、城峰神社へ住み込んで社務をおこなった。また、坂本氏は、秩父郡両神村の出身だったという。現在、社務所トイレがある場所に、当時は木造二階建ての建物があり、二階をキャンプなどの利用のために一般に貸し出していたが、その一階を住居とした。社務の他、キャンプの手続きは観光協会の管轄であったが、坂本氏に任せた。坂本氏は、自動車免許を持っておらず、歩きを基本に移動していた。石間入り口から神社まで約八^{キロメートル}の距離があるが、歩いて往復していたようである。長距離で移動する時は、帰りは半納集落までタクシーで帰宅して、その後神社まで歩くようなことをしていたと思われる。坂本氏は、当初、母親と妻の三人で暮らしていたが、最後は一人暮らしになった。加藤仁男氏は、元旦祭で神社へ行く時、奥さんの作ったお節料理などを持って行ったという。その

後、坂本氏はひっそりと亡くなった¹⁸⁾。

その後、沢戸集落の元会長であった新井隆一氏が、神職資格はないが、神事を担当したという。神職資格を取得しようとしたが、年齢制限から取れなかったという。五年ほど社務を勤めたという。

その後、神職不在の状態が続き、氏子の間では、誰かに神職になってもらいたいという声が高まっていった。新井貞雄氏が会長の時、新井進氏に白羽の矢が立ち、会長が新井進氏に薦め、新井進氏は了承した。進氏は、漆木在住である。進氏の住む漆木の鎮守である諏訪神社には、奉納行事としての神楽があり、氏は舞手となる。漆木の神楽は、城峰神社の祭礼にも奉納されるが、進氏も神楽の舞手であった。神社との縁は、深かったのである。新井進氏は大手電気メーカーに勤めていたが、様々な資格を得て、退職後の準備を進めていた。そのタイミンで、依頼したのである。了承した進氏は、神職免許を取得するため、二年連続で、夏に京都へ講習を受けに出かけ、見事神職資格を取得した。現在は、日常、農業をしつつ、社務を勤めている。

現在、新井進氏は、毎週日曜日は神社に詰め、権祢宜としての職務を果たしている。城峰神社の祭礼の執行の他、石間にある神社、氏子の地鎮祭、神葬祭などの神事も執り行っている。また、日常は、朝の祝詞、祭礼準備、護符頒布、社殿・社務所・境内の掃除や草刈りをおこなっている。そして、半納から城峰神社までの参道、神社へ至る街道、以前はそうでもなかったが、近年は城峰への登山客が埼玉県道二八四号の道路も利用するので、こちらの掃除、草刈りもおこなっている¹⁹⁾。進氏が神職になった時、装束を購入したが、その他は進氏が自費で購入している。進氏の社務に対して、観光協会から管理手当が出ているものは

の、進氏はそれ以上の働きをして地域に貢献しているのである。

(2) 氏子組織と城峰山観光協会

かつて、城峰神社の氏子区域は、城峰山山麓の石間の他、日野沢(皆野町)、兎玉など広域に展開していたという。しかし、神社維持に関して、問題が起きて、石間以外は手を引いたという。その後は石間の氏子のみによって、城峰神社が維持されていくことになった。

さて、石間は、五つの集落で構成されている。城峰神社に近い順に、半納、沢戸、中郷、漆木、沢口となっている。特に、半納、沢戸は、それ以外の集落から城峰神社の宮本と言われ、他の集落より氏子度が高い地域となっている。他三集落も城峰の氏子意識はもちろん持っているが、各集落にある鎮守への思いが強く、やはり、半納、沢戸とは少し状況が違っている。また、現在、石間全体で現在百二十軒ほどの家があるが、一人世帯も増え、過疎化が進行しており、神社の担い手も減少してきている状況である。

次に、城峰神社の組織とその役員に関してみておこう。神社の神社総代会(氏子組織)、城峰山観光協会(以下、観光協会)は、ほぼ一つの組織である。神社総代会の総代は、各区から一人ずつ選出され、役職に就く。そのとりまとめ役が神社総代長であるが、観光協会長も兼任している。現在、観光協会会長としての職務が重視されているからか、氏子らは日常的に「会長」と呼んでいる²⁰⁾。ちなみに、観光協会は、昭和三十三年(一九五八)年に、行政から声がかかって結成された組織である²¹⁾。現在、神社総代会、観光協会には、会長(神社総代長)が一名²²⁾、副会長二名、会計一名の都合四名の役職があり、神社運営がなされている。実

は、かつては、役員は五名であった。しばらく前のこと、半納の家が十軒を割ることになってしまい、役員を勤める余裕がなくなってしまう。そのため、現在は残りの四つの集落から、役員が選出されることになったのである。

会長始め、役は当番で持ち回りされている。任期は二年である。かつては、選挙で決めていたが、ここ十年くらい前から（新井久雄会長時から）持ち回りになった。会長に関しては、次期会長になる人は、会長になる前の一年間副会長を勤め、会長の仕事を覚えてから会長職に臨むことになっている。また、役員は、同時に宗教法人の責任総代として登録されるが、こちらは三年任期となっている。

かつては、会長、副会長、会計の役は、半納、沢戸の二集落で引き受けていたという。神社に近く、先に記したように氏子度が高く、神社との縁が深いからと考えられている。現在、神社に近い集落ほど不便であり、過疎化が進展し、皮肉にも前記したように半納が役を勤められない状況になっている。

また、各集落では、町内会組織の役である区長、代理者、祭事を二年おきに出する。改選のタイミングは集落ごとと違う。これらの役も神社運営において、大きな役割を果たしている。

三 城峰神社の春季大祭と城峰講・御眷属拝借

(一) 城峰講と春季大祭

先に述べたように、城峰神社は、オイヌサマ信仰寺社である。城峰神社には、古くよりオイヌサマ信仰があったと言われている。ただし、城峰神社には、オイヌサマ信仰発生の起源の理由として、秩父地方の他の

オイヌサマ信仰ゆかりの神社で引き合いに出されることが多いヤマトタケル伝承は伝わっていない。同じオイヌサマ信仰の拠点となっている隣の吉田椋神社、神川町矢納の城峰神社には、ヤマトタケルの伝承が伝わっている。故に、吉田石間の城峰神社にも、かつてヤマトタケル伝承があった可能性も残されている。

また、オイヌサマ信仰の現在中心である三峰神社で、オイヌサマ信仰を最初に始めたと伝えられ、三峰山中興の祖と称えられている住職日光の出身地は、吉田であった。日光は、上吉田の太田部の朝日屋という造り酒屋に生まれた²⁴。そのようなことから、当地は古くより、オイヌサマ信仰が盛んな地域であったと考えられている。また、文献上で近世には、春先には、長伝寺でオイヌサマの御眷属が貸し出されていたことも確認できる。

さて、城峰神社へ御眷属拝借（オイヌガエ）のために、一年に一度登拝する信仰集団が、城峰講である。その信仰圏は、かつては、城峰山麓、秩父市内、皆野町日野沢、本庄、深谷（以上埼玉県）、群馬県の高崎、前橋など広域に展開していた。しかし、講の活動は徐々に鈍り、その数は、近年は激減している。

城峰講の登拝形式は、代参が多い。講のオヒマチなどの集会で、講員間で、くじなどを引いて、代参者を選ぶ。概ね二〜三人程度の代参者が、五月三日（かつては、五月二日）の春季大祭を中心とした期日に登拝する。代参者は、古い御眷属を講で設置している祠から取り出し、神社へ行って提出し、引き替えに新しい御眷属を拝借し、同時に付札も受けてくる。それらを地元を持ち帰り、御眷属は講の祠へ納め、付札は、講員宅へ配布する。付札は、御利益に応じて、火除け、盗賊除け、お姿

があり、講員は、効果があるよう、火除けの札を台所、盗賊除けの札を、戸口に貼るなどした。代参の帰山を待つて、オヒマチをおこなう講も多かった。⁽²⁵⁾

一般的に、オイヌサマは、害獣除け、火難除け、盗難除けなどの御利益が期待されているが、吉田石間の城峰神社も同様である。吉田石間の城峰神社の城峰講は、埼玉、群馬に多く存在している。特に、群馬で展開している理由は、近世より養蚕が盛んな地域であったため、養蚕の大敵であるネズミを、城峰神社の御眷属によって退治してくれることを祈願したからと考えられている。

ただ、現代は、地域の伝統性の衰退、団塊世代の個人主義からの民間信仰離れ、レジャーの多様化、旅行の個人化からの参詣離れ、養蚕の衰退など、様々な要因から、城峰講などのオイヌサマ講は、急速に衰退してきている。吉田石間の城峰神社の城峰講においては、現在でも登拝を続けている講は、十講程度まで減ってきている。

それでは、続いて御眷属拝借おこなう春季大祭について、準備の段階から記述したい。⁽²⁶⁾

(2) 春季祭祀前の準備

城峰神社は、元旦祭、節分祭、祈念祭(二月二三日)、春季大祭、秋季大祭(一〇月二日)、新嘗祭(十一月二〇日)の年六回の祭祀が代表的なものである。その中で最も重要で賑やかで、御眷属拝借もおこなうのが春季大祭である。ちなみに、最近では、春季大祭時に訪れる登山客も増えてきている。⁽²⁷⁾

春季大祭は、五月三日に挙行される。かつては、五月二日におこなわ

れていた。勤め人が増え、平日には参加しにくくなった。そこで、必ず休みになる祝日である憲法記念日に変更された。当初、宮司は、祭日には意味があるということで、変更には難色を示していたが、最終的には了承し、変更されることになった。

祭日は、山仕事、登山者の安全を祈願する城峰山の「山開き」の期日でもあるが、山開きに関して、現在特に何か行事をしているということはない。ただ、祭礼当日、今日は山開きであるという意識を氏子らは、皆持っているという。ちなみに、秋季大祭の祭日は、山開きで祈願したことへ、その無事であったことを感謝する「山閉め」の意味も込められているが、氏子らは山閉めという意識をあまり持っていないという。

さて、準備に関してである。まず、三月一五日頃、祭礼一ヶ月前頃までに返事をくれるよう城峰講へ(二〇一四年祭礼時、十二講程度)案内を出す。⁽²⁸⁾送付する内容は、案内文(招待者案内は加藤仁男氏作成のもの)の他、代参者名簿(注文書)、返信封筒である。現在準備は、新船氏が中心になっておこなわれている。案内文と封筒を用意(新船氏が役員時代からの慣例)した後、会長のところへ持参する。会長(会長は名簿管理をしている)は、その後住所を記し投函する。役は持ち回りであるが、やはり任期を超えて仕事に携わる人が出てしまう。一方、そういう人がいないと運営は安定しないのが実情である。講より、返事が帰ってきたら、御眷属に、講名、氏名を記す。ちなみに、近年、毎年、返事してくれる講の数は減ってきている。

(3) 春季大祭当日

現在、春季大祭は、役職者を含む二〇人ほどの氏子で運営されるとい

う。春季大祭での役割は、城峰講の代参者の直会の席における接待係、代参者の御眷属などの対応をする受付などである。役割は、四月二〇日（現在は四月第三日曜日）におこなわれる祈願祭後の直会兼総代会の席上で決定する。

現在は、城峰神社まで車で上がることができるが、四〇年ほど前までは、半納から、氏子も代参者も歩いて祭礼へ行った。氏子・講の人たちにとって、神社へ訪れるだけでも大変なことであった。しかし、氏子らは、祭礼準備品（米、酒、食材なども）を担いで登ったのである。神楽を奉納する漆木集落の氏子らは、神楽道具も担いで上がった（背負子に神楽の道具を載せて、それを担いで登った）。そのため、前日のうちに登り、社務所に前泊せざるを得なかった。⁽³⁰⁾その当時は、役に就いていなくとも、氏子はほとんど祭礼に参加した。当時は、登拜する講も多く、近隣の村人も参加した。そのため、祭礼は大変賑やかだった。現在は、焼きそばなどを売る出店が一家店ほどしか出ないが、当時は十店以上出ていたという。酒も皆多く飲んで、喧嘩も多かったというが、娯楽の少ない時代、人々にとって、大変楽しみなイベントであった。⁽³¹⁾

その後、林道（城峰山への林道は、五本ある）が出来て、半納まで車で行けるようになって、半納に駐車して、その後は歩くという状態がしばらく続いた。近年になって、社務所まで車で乗り付けられるようになった。

春季大祭当日は、午前十一時から祭典が挙行される。宮司新井直行氏、権祢宜新井進氏、助勤新井直行氏の従兄弟が神事を司る。修祓、君が代斉唱、玉串奉奠、挨拶の順序で進む。

城峰講の代参者は、城峰神社へ到着すると受付へまず出向く。代参者



(写真5) 参道

は、地元の講の祠などに納められていた古い御眷属を持参しており、受付へ渡す。祈願料（直会の食事代込み）を支払い、食事券受け取り、休憩所へ移動して直会をして待機する。その間、新しい御眷属は祭典で祈願されている。新しい御眷属が用意されると、それを受け取って帰山する。氏子らも、春季大祭当日に御眷属を受ける。ただ、現在は

氏子で御眷属を受けない人も増えてきたという。受付では、御眷属受けの他、灯明料の受付（祈祷の受付）もおこなう。

直会⁽³²⁾は、神酒・仕出し弁当や寿司（海苔巻き・稲荷）が振る舞われる。休憩所の接待係は二〜三名である。また、出された食事を、持ち帰る代参者も多くいる。代参者のうち車の運転手は酒を控え、残りが飲んでいくという。

また、祭礼には駐車場の鳥居から拝殿までの参道に千本旗を立てるとい⁽³³⁾う（写真5）。

おわりに

本稿作成にあたっての調査は、筆者が予てより進めているオイヌサマ信仰の総合的研究の一環という位置づけから始めた。ただ、いつも、ま

ずはオイヌサマ信仰を支える寺社はどのような歴史、信仰を有しているのか、寺社のすべてを洗いざらい調べ挙げるような心がけている。本稿は、まず吉田石間の城峰神社はどのような神社なのか、それを文献、特に聞き取りから全体的に記してみた。それが、将来オイヌサマ信仰の全体像を描き出すことにつながると考えたからである。

それでは今回まとめた結果、見えて来たことを記しておきたい。城峰山は、千段級の山岳であり、その信仰を背景とした城峰神社は、山岳の山腹に位置している。一般的に里宮は早い時期に山麓の集落の中などに成立している事例が多い。なぜ、このような山頂に近い場所が里宮として有り続けたのか。その理由として、そこが、気候的に過ごしやすい場所であると同時に、一つには湧水の存在が大きかったことが見えてきた。そのことによって、そこで祭礼がおこなえる。そして、神職、社守が住むことを可能にすらしめたのである。

また、人々は、そのような神社をどのように日常支えていたのであるか。歩きで行かなければならない時代は、そこへ到達するだけでも難儀なことであった。モーターゼーション、そしてそれを受けて造られた林道によって、神社へのアプローチは大きく変わった。しかし、不便であった自動車時代以前の時代のほうが、氏子を始め、講の人々は、神社を支えるべく大いに奮闘していたのである。その有り様を知ることができた。

さて、そのような「日常」は、文献に記されるようなことではない。人々の記憶の中に、留められているに過ぎないのである。故に、これらのことは、今書き留めておかなければ、人々とともに消え去っていく出来事であろう。文献の発掘も、確かに大切である。ただ、文献にも記さ

れないような、このような出来事は、今書き留めておかないと取り返しのつかないことになる。本稿は、このようなことを理由に、特に聞き取りから得られた話を重視して構成してみた。ただし、聞き取りの際、人によって記憶というものはあいまいであることを感じた、そこは、やはり問題が残る。その処理のあり方は、今後の課題としたい。今後は、聞き取り調査を多く実施し、集約させる作業をおこないたいと考えている。

註

- (1) 拙稿「狼信仰に関する一試論―狼信仰寺社とその由緒―」（『武蔵大学人文学会雑誌』一六一（四一―二）、二〇一〇年）
- (2) 直良信夫『日本産狼の研究』校倉書房、一九六五年、平岩米吉『狼―その生態と歴史―』池田書店、一九七二年、野本寛一「山犬信仰の発生と展開」（『焼畑民俗文化論』雄山閣、一九八四年、飯塚好「お犬さま信仰とその周辺―秩父地方を中心として―」（『埼玉県立博物館紀要』一五、一九八九年）、牧野眞一「山犬信仰の諸相」（宮本袿婆雄編『民俗宗教の西日本と東日本における構造的相違に関する総合的調査研究』（平成三年度科学研究費補助金「総合研究A」研究成果報告書）、一九九二年）、拙稿「秩父地方に展開する狼信仰寺社とその由緒」（『動物観研究』一五、二〇一〇年）参照
- (3) 曾根原正宏「御炊上祭について」（『埼玉神社廳報』一五三、二〇〇〇年）参照
- (4) 城峰神社は埼玉県児玉郡神川町矢納にも鎮座しているが、吉田石間とは関係がない。（拙稿「城峰神社（矢納）」のオイヌサマ信仰と城峰講」（長谷部八朗編『講』研究の可能性』Ⅲ、慶友社、二〇一六年）参照
- (5) 拙稿『武州三峰山の歴史民俗学的研究』岩田書院、二〇〇九年他
- (6) 「城峰神社」（『秩父郡市神社誌』埼玉県神社庁秩父郡市支部、一九六五年、六三頁）、「城峰神社」（埼玉県神社庁神社調査団編『埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父』埼玉県神社庁、一九八六年、一三六八）

- 一三七一頁)、「城峰山」(『角川日本地名大辞典11埼玉県 角川書店一九八〇年、四七七頁)、「石間」(『角川日本地名大辞典11埼玉県 一三三二頁)、「城峰山」(『日本歴史地名大系第11巻 埼玉県の地名』平凡社、一九九三年、六四八～六四九頁)、「石間村」(『日本歴史地名大系第11巻 埼玉県の地名』六五二頁)、神山弘「城峰山ものがたり」(『秩父 奥武蔵 山と伝説の旅』金曜堂出版、一九八五年)、宮崎茂夫「猪狩・城峰のお犬様―埼玉県秩父郡―」(『あしなか』一九八四年)、秋澤英雄「秩父お犬様紀行―城峰山・両神山・三峯山―」(『あしなか』二三八、一九九四年、吉田町教育委員会「吉田町史」吉田町、一九八二年)
- (7) 二〇一四年から二〇一五年、筆者による新井直行氏(城峰神社宮司)、小林和夫氏(氏子総代長)、加藤仁男氏(元氏子総代長)、新井進氏(神職)への聞き取り調査
- (8) 電波塔には、国土交通省の周辺ダムの監視システムがある。ダムの水位が監視され、台風などによって水量が増えた場合の放水などの判断をおこなうという。川越の事務所管理している。ちなみに山頂から直接見えるダムは二つで、その他のダムは反射板を利用しているという(新井進氏談)
- (9) 「神川町」HP
<http://www.town.kamikawasaitama.jp/kanko/spot/jouminem.html>
 (2016.3.15)
- (10) 「株式会社ヤマキ」HP
http://yamaki-co.com/?page_id=42 (2016.3.15)
- (11) 「WATER-YOGO JAPAN」
<http://meisui.sakura.ne.jp/water/archives/1467> (2016.3.15)
- (12) 神山弘「城峰山ものがたり」(『秩父 奥武蔵 山と伝説の旅』金曜堂出版、一九八五年、一八三頁)、栃原嗣雄「秩父の民俗―山里の祭りと暮らし―」幹書房、二〇〇五年、二五二頁、参照
- (13) 上水道完成の記念式典には、招待者、議員、交流館でうどん作りをしている女性達などが参加した。加藤仁男夫妻がペットボトルを買ってきて、加藤氏を書いた「石清水」のラベルを手作業で貼って、上水道の水を入れて記念品として招待者に配布したという。百本以上は作ったという(加藤仁男氏談)
- (14) 前掲「城峰神社」(埼玉県神社 入間・北埼玉・秩父)、一三六八

- (一三七一頁)
- (15) 現在の当主にあたる人物は、先祖の歴史に興味があり、新井宮司や埼玉県神社庁など関係者へ数年前に連絡してきたという。その際、秩父市街地の自宅に、神社に関する古文書類も多く保存されていることを知らされた。それまで、神社に関する古文書類は散逸してしまっていると考えられていた。事実、二〇年ほど前、埼玉県神社庁で秩父郡の神社調査がおこなわれた際、当社に史料確認の問い合わせが来たが、僅かな史料を知らせたのみであった。史料調査はまだ、おこなわれておらず、調査実施の暁には、神社の歴史の新たな知見が得られるという期待が高まっている(新井直行氏談)
- (16) 現在宮司が神事に来るのは大祭で、それ以外の祭礼には直行氏の叔父、現在はその子が訪れる(直行氏従兄弟)
- (17) 加藤仁男氏の記憶によれば、現在もある屋号が板谷の、その親戚筋の人で、当時「せんさん」と呼ばれていた人物である。祭礼で、祝詞を挙げていた記憶がある(加藤仁男氏談)
- (18) ある年、料理のお礼の電話を加藤仁男氏の奥さんがもらった。長電話になったが、その時、坂本氏は「怖い」ということを言っていたという。奥さんは、その時一人暮らしで、坂本氏が誰かに襲われるという怖さを感じていると解したという。それから一週間後、坂本氏は、建物で遺体となって発見された。一人暮らしの寂しさを紛らわすためか、酒量も多く身体を壊していたこともあって、病死であった。怖さというのとは、体調の悪さ、迫り来る死へのものだったのではないかと、今は解している(加藤仁男氏談)
- (19) 神社に人が不在の期間、神社はほこりまみれで汚れていた。新井進氏が神職になった時、新井直行氏は、掃除をすることを奨励したこともあり、進氏は、日常、神社の掃除を徹底的におこなっている。また、その当時会長であった加藤仁男氏と奥さんも進氏と一緒に大掃除をおこない、社務所の百枚以上ある座布団のカバーを自宅へ持ち帰り洗濯したという(加藤仁男氏談)
- (20) 境内には、秩父市所有のコテージがある。貸し出して得られた収入は、一旦市へ納入されるが、一部は地域に還元される。これらの運営は観光協会の職分である
- (21) 城峰山観光協会は、現在秩父観光協会は社団法人であるが、その支部として吉田観光協会が、そしてその下部組織として位置づけられている

る。旧吉田町域には椋神社の観光協会などがある（加藤仁男氏談）

- (22) ここ近年の会長は、六代目新井貞雄氏（沢戸）、七代目加藤仁男氏（沢口）、八代目新井久雄氏、九代目福泉義次氏（中郷）、十代目小林和夫氏（漆木）の順番で勤めている。新井貞雄氏までは、会長は半納・沢戸の人が勤めていた。以後は、四つの集落から選出されることになった

- (23) 他の役職同様会計は一人であるが、会計帳簿は二冊ある。一冊は観光協会用、もう一冊は神社用であるが、宗教法人用である

- (24) 前掲神山弘「城峰山ものがたり」（秩父奥武蔵山と伝説の旅）一七七頁）参照

- (25) 前掲『新編高崎市史 民俗編』（五〇四頁）には、高崎市山名町の事例が紹介されている。高崎市史民俗編、四月の堀浚い日に、代参六名が登拝する。そのとき、村に残った隣保組長が祠の掃除、しめ縄などを張った。代参が帰山するとお札を配布して直会をおこなう。狐が憑いたときなど、よく落ちたという

- (26) 城峰神社では、オイヌサマ信仰の他、庚申信仰もある。境内には「百庚申塚」という周囲18メートルの、庚申と刻まれた石が建てられた塚がある。現在城峰講で最大規模を誇る高崎市住吉町の城峰講の祠がある共有地には、庚申塔がある。かつては大変庚申信仰が盛んであったという。城峰講が結成された理由は、近代に住吉町で火災が複数回起こり、その火防のためと考えられている。ただ、火防の御利益のあるオイヌサマを祀る神社はもちろん、秋葉、愛宕など数多くある火坊の御利益を有する神社の中から吉田石間の城峰神社が選択された理由は庚申信仰が関係しているかも知れない。前掲「城峰神社」（埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父）、一三六八―一三七一頁）、拙稿「高崎市住吉町の城峰講」（埼玉民俗）30、二〇一六年）参照

- (27) 新井貞雄氏が会長であった時、甘酒を祭礼で振る舞うようになったが、祭りに来た人以外、登山客にも振る舞った。女性達が火鍋で作った。大変、好評であった（加藤仁男氏談）

- (28) 現在、神社、氏子と城峰講とは、春季大祭の時以外接点がない。講のことは、神社、氏子側は、良く分からない。電話番号も分からないという。前年記帳した代参してきた人の住所へ送る。ちなみに、約三〇年前には、毎年役員で日帰り旅行をしていた。ある年は、前宮司新井啓氏、権祐宜の坂本高栄氏も同行して、群馬県富士見村や六合村の城

峰講のところへ出向き、講の祠（藁葺き屋根）で祝詞を挙げ、皆で拝礼してきたこともあった。その当時は、講と関係があったのである（新井直行氏、小林和夫氏談）

- (29) 春季大祭以外、節分祭などの祭礼でも同様で、会長だった当時の加藤仁男氏は、祭礼以外にも頻繁に城峰神社へ行ったので、家にあまりいなかったイメージがあるという（加藤仁男氏談）

- (30) 新井啓氏が、宮司時代の話である。もちろん宮司も歩いて登っていた。新井氏は祭礼がある時は、半納まで車で出かけ、半納の岩城家へ一泊し、翌日神社へ徒歩で登った。社務所に二〜三泊して、降りてきて、また岩城家に一泊して帰る習慣があったという（新井直行氏談）

- (31) かつては、祭礼の時、学校は臨時休校になった。また、戦前、祭礼の時に子供達は熊笹を取ってきて、印刷した紙を挟んで登拝者へ記念に配布したという（加藤仁男氏談）

- (32) 新井貞雄氏が会長の時、直会の席で城峰講の代参者の人たちを手厚く接待しようということになり、いろいろな工夫をしたという。その次に会長になった加藤仁男氏も、その精神を引き継いだ。まぜ御飯、山菜料理などを出して振る舞ったという。火鍋でまぜ御飯を作るので、味は良い。現在は春季大祭で作ることはなくなったが、中小の祭礼時の直会で役員用に使っている。ちなみに現在では火鍋でなく、炊飯器で作っている。春季大祭で作っていた当時は、下準備に一週間ほどかかったという。加藤家の庭で、露を作ってこれを利用した。タケノコは、裏に竹藪があるものの、猪が食べてしまうので、購入した。ウドも購入した。大量に必要なので、秩父市寺尾の直売所の他、その他秩父の直売所を買い歩いたという。買いに行くのとタケノコが店からすべてなくなるなど、あまりにも大量に購入するので、店の人が何か商売に利用するのかと驚いたという。軽トラック二台分は、購入したという。そのため、かなりの出費になったが、多くが自費であった。城峰神社からも、若干費用が支給されたがとも足りなかった。加藤氏も、調味料程度度出してもらえればと言っていた。加藤氏は吉田町議会議員、秩父市議会議員をしていたが、秩父市寺尾の知り合いの秩父市議会議員の人が、善意で加藤氏のところへ材料を持ってきてくれるようになった。清酒二升をお札に渡し、祭典にも招待したという（ただし、招待者は、三〇〇〇円を持参するので逆に赤字になってしまった）。頂いたものと比較して、お札は微々たるものであったが、いつ

も持つて来てくれたという。材料が集まった後には、今度は蔭を茹でて剥く作業、タケノコも皮を剥く作業があった。大変な、重労働であった。加藤氏は、神社で大祭の準備があるため、奥さんが一人で、自宅で黙々と作業を続けたという。しばらく経つと、地域の改善センターで作業をするようになった。ごま和えなどにして出来た料理は、タッパ―(大きいもので、十個くらいになった)に入れて神社へ持っていった。三百〜四百人分を、作ったのである。神社では、女性達で盛りつけた。講の人たちからは、大変人気があった(加藤仁男氏談)

(33) 節分祭頃から、千本旗の奉納者を受け付ける。奉納者は一人が千枚一組で、数万円を支払う。旗には奉納者の名前が記される。誰も注文者がいない場合は「氏子中」と記した。年ごとに担当の集落があった。集落で集まりの場を持って、印刷して竹を割ってそこに挟み込む作業をする。昔は全て手書きであった。「祈願大願成就〇〇」+「名前」と記す。多いときは数千枚も立てたという。いつからおこなわれているかは、現在では定かでない

〔追記〕

本稿作成にあたっては、新井直行氏(城峰神社宮司)、小林和夫氏(氏子総代長)、加藤仁男氏(元氏子総代長)、新井進氏(神職)、その他城峰神社氏子の方々に、大変お世話になった。改めて、お礼申し上げます。